

「都名所図巻 中巻」

17 紙より

寺町通りを更に下がり、夷川通り（冷泉通り）以南の地を描く。

（上段）

石川とのも殿御やしき（石川主殿殿御屋敷）

淀藩主石川主殿頭憲之の屋敷。寺町通りの東、お土居を越えて二条河原に面してあった。憲之が淀藩主となったのは寛文9年（1669）であるが、主殿頭拝命は慶安5年（1652）。

すみのくらやしき（角倉屋敷） 付り舟入（付り舟入）

京都の豪商で、高瀬川支配の代官を勤めた角倉家の屋敷。

お土居の東側、二条通りの南に位置し、その南側に高瀬川一之舟入があった。この図が描かれた頃の当主は角倉与一玄恒である。なお宝永の大火で隣りの要法寺が移転した跡地も買収して屋敷を広げた。現在の日本銀行付近。

もうり殿御やしき（毛利殿御屋敷） 毛利藩屋敷

一之舟入の南側にあった萩藩毛利家の京屋敷。

（下段）

かゞのかみ殿御やしき（加賀守殿御屋敷）

毛利藩の屋敷の更に南にあった加賀藩前田家の京屋敷。現在の河原町御池東南部にあたる。

こり木町（樵木町）

上段より高瀬川が南流する。高瀬川の両岸には、その荷揚げする商品により町名が付くが、二条下る樵木町では、薪や炭などが荷揚げされた。木屋町通り。

18 紙

三条大橋を中心にその東西付近を描く。

（上段）

さんでうはたこや（三条旅籠屋）

東海道の終点三条大橋を渡ると、旅人宿が三条通りの両側に集中してあった。宝暦12年（1762）刊の『京町鏡』には、38軒の旅籠が挙げられている。旅籠屋の前には道行く旅人が描かれる。

さんでうの大はし（三条の大橋）

三条通りの鴨川に架かる橋。天正17年（1589）、豊臣秀吉の命で石

橋が架けられる以前は、大きな橋はなかったようである。翌 18 年に完成した時の擬宝珠が残る。

なわての三間でう（縄手の三軒町）

鴨川東岸に沿う大和街道（大和大路）を、縄手と呼んだが、四条以南の河原が開拓され、川から離れたために、三条・四条間のみを縄手と称するようになった。この通り沿いに町屋が目立つようになるのは丁度寛文（1661～73）頃で、三軒町の名は新しく町場化して付けられたと思われる。現在その名はないが五軒町・今七軒町などの町名が残る。

（下段）

三てうこばし 付中嶋（三条小橋 付中嶋）

現在は高瀬川に掛かるが、古くはこの辺りの鴨川には中島があり、そこに渡る橋が三条小橋であった。慶長 19 年（1614）に完成した高瀬川は、この流路を利用した。なお秀吉は、大橋に続いて翌年には小橋も新しくしており、天正 19 年在銘（1591）の擬宝珠が残る。

だんのう寺（壇王寺）

三条大橋東詰の北側に位置する浄土宗の寺院。壇王法林寺と称す。岡崎にあった蓮華蔵院の寺籍を継ぐと伝え、一時鴨川の洪水で三条東洞院に移転したが、旧地に戻ったが、永禄年中に全焼。慶長年中に袋中上人により現在地に梅壇王院として再興された。前の通りは東海道。

19 紙

四条橋から東、祇園社に至る四条通りから。祇園社を描く。

（上段）

四でうのはし（四条の橋）

四条橋は公許橋ではなかったのも、仮橋であった。

四でうかわらしばい（四条河原芝居）

四条の河原は慶長 12・13 年頃以降から、繁華な興行街として発達し、河原には七つの櫓（芝居小屋）が許されたというが、それは寛文 8 年（1668）以降のことで、寛文元年には野郎歌舞伎が禁止となり、歌舞伎の座が江戸に下った記録がある。再び歌舞伎の座が復活するのは、寛文の新堤ができ、興行街が東河原に限定されて以降で、寛文初年から 8 年頃までは、京都では歌舞伎興行が禁止されていた。この図巻が描かれた頃は、芝居が停止されていたのかもしれないが、この歌舞伎舞台は、明暦 4 年（1658）刊の『京童』とほぼ同じ構図であり、承応

元年（1652）に若衆歌舞伎が禁止されて以降の野郎歌舞伎である。
きおん町めやみのぢぞう（祇園町目疾みの地藏）

四条大和大路（建仁寺通り）東南にある浄土宗仲源寺。雨止地藏の名称が転じたといわれる。もと四条橋東北にあり、洪水のおりに止雨を祈願したという。天正13年（1585）、秀吉の命で現在地に移転。眼病祈願の地藏として、また祇園村の惣堂として機能した。

（下段）

ぎおんのぼうしゆぎやう（祇園の坊執行）

祇園社は中世以来比叡山延暦寺の支配下にあり、その実権は執行が持っていた。その執行の坊が、祇園社西門の前、四条通り北側にあった。現在の八坂小学校の地である。

ぎおんの町ちゃ屋（祇園の町茶屋）

祇園社西門の石段下、大和大路までの四条通り両側には、多くの茶屋が存在し、祇園町と称した。ただし今日の如く南に広がるのは明治以降、建仁寺の寺地が上地されてからで、茶屋は主に四条通りの両側にあった。

ぎおんろうもん（祇園楼門）

図の順番からすればこの楼門は四条通りの突き当たり、西楼門にあたる。石段が描かれるのもその証拠である。西楼門は明応6年（1497）の建物。ただしその奥に拝殿と本殿が描かれることを考えると、正面の楼門とも受け取れる。しかし正面であれば文政4年（1821）に焼ける以前には中門があったはずである。

同かぐらどう（同神楽堂）

拝殿と本殿の間、東側にあった。

きおんはいてん（祇園拝殿）

本殿は南面しており、拝殿もその前にある。この図では向きが90度曲がって描かれ、絵画的虚構がある。しかしこの時代に祇園社を描く多くの絵画が、西楼門から拝殿・本社を一直線に描く方法を取っているから、一つの約束事とも考えられる。なお、現在の拝殿は明治初年の建築。

きおんほんしや（祇園本社）

南を向いて建つ本殿は、承応3年（1654）の再建。この図が描かれる少し前に完成したはずである。

20 紙

祇園社の東方に広がる真葛が原一帯を描く。

(上段)

しんふくゐん (真福院)

現在この付近には大谷本廟(東大谷)があるが、この親鸞の廟は、この凶巻成立以後の寛文10年(1670)に創られたものであり、それ以前は不明。真福院という寺院については不明であるが、大谷本廟が出来る以前にあった寺かも知れない。

まるやま (円山)

現在円山公園のある地で、華頂山の西麓の小丘。図に描く堂舎は、時宗の安養寺。この寺は山号を円山といい、塔頭として六阿弥坊を擁した。ただしこれら時宗の寺院は、宗教施設というより、遊興の場として機能していたという。

ちやうらくじ (長楽寺)

安養寺の南、長楽寺山の東麓に位置した時宗の寺。平安時代は延暦寺の末寺で、南北朝末期に時宗となった。後水尾院の勅願により、正保年中(1644~48)に本堂を落成したというから、この図はその本堂と思われる。

へんざいてんのみや (弁財天の宮)

長楽寺の庭に祀られる弁財天社。この社のある庭は、相阿弥の作とされる名庭。ここからは京都市中が一望に見渡せた。弁財天は琵琶の代わりに飾玉を抱くといわれる。

(下段)

そうりんじ (双林寺)

長楽寺の西、祇園社の南東にある。天台宗の寺院として平安時代の盛時には、広大な寺領を有したが、のち荒廃し、南北朝期には時宗国阿派の道場となっていた。応仁の乱で炎上して以降は寺基を縮小。南隣に高台寺が建立されると、さらに寺域を狭めた。中世期以来付近は観桜の名所とされた。本堂の脇には石碑や五輪塔が建つが、これは鳥羽天皇の皇女綾雲内親王によって建立された法華塚や、平康頼・西行・頼阿など、この寺に縁のある人々のものである。境内では矢来で囲まれた鞠の庭が設置され、蹴鞠に興じる人々が描かれる。

こう大じ (高台寺)

双林寺の南に広大な寺域を占める。秀吉の妻高台院が、秀吉の菩提を弔うため、徳川家の援助を得て建てた寺である。東山のこの一帯は、桜の名所とされたが、天和3年(1683)に京都を訪れた儒者某の『千種日記』には「高台寺に至る、門を入れて左に行、円徳院という寺有、

その庭の桜は東山にならびなき名木」と記している。しかし寛政元年（1789）以降はたびたび火災に遭い、昔日の姿はない。

21 紙

祇園社南門より南から、清水寺に至る東山の名所を描く。

（上段）

ちや屋（茶屋）

祇園から清水に至る一帯には、時宗の寺院が経営する多くの豆腐茶屋などがあり、豆腐を揚げる油の臭いが立ちこめていたという。

しもかわら（下河原）

祇園社南門前一带の広域な場所の名称で、古くは東山から流れ出た菊溪川の河原であったという。しかし高台寺が建つとその門前付近は遊興の地として発展し、料亭や妓楼が建ち並んだ。図に描かれる井戸は菊の井。

七くわんおん（七観音）

浄仏寺という真言宗の寺院であるが、七観音として知られる。中世には烏丸六角の地（現在町名として残る）にあったが、秀吉により寺町中御霊に遷され、寛文元年（1661）に再びこの地に移転した。この図巻の描かれた頃は、未だ移転したばかりの新しい寺観であったと思われる。

八さかのおさるどう（八坂のお猿堂）

七観音の南にある金剛寺と呼ぶ天台宗の寺院であるが、一般には八坂の庚申堂として親しまれた。洛東の名所の一つで、摂津四天王寺の庚申堂を移したという。

八さかのとう（八坂の塔）

祇園社と清水寺の中間に位置し、東山の景観を代表する五重塔であるが、正式名称は法観寺。創建は古く、飛鳥時代の瓦が出土している。この辺りに居住した渡来系氏族の八坂氏に関係した寺院といわれる。塔は永享8年（1436）に再建されたもので、現在のものと同じである。

（下段）

りやうぜん（霊山）

東山の霊山（霊鷲山）にあった寺で、古くは霊山寺と号したが、南北朝期には時宗の寺となり、正法寺と称した。しかし以後も一般には霊山と呼ばれ親しまれた。天正年間に寺観が復興され、山頂に本堂・阿弥陀堂・開山堂などがあり、山下には多くの塔頭があった。しかし時宗の寺院であっただけに、江戸時代は塔頭が眺望の良い遊山の地とし

て、書画の展覧会や料理なども出す場所となっていたようである。
さんねんざか（三年坂）

清水に至る途中の坂。産寧坂とも書く。

きやうかくどう（経書堂）

三年坂を登った角にあり、清水寺成就院の末寺。来迎院が正式名称。
参詣者は布施をして、経木に法華経を書いてもらったのでこの名がある。

大にちどう（大日堂）

経書堂の東にあり、清水寺宝性院末。真福寺が正称であるが、大日如来を祀る故にこの名で呼ばれる。

くるまやどり（車宿り）

大日如来を本尊とする堂であるが、道内に5部の大乘経を入れた箱があり、その下の輪を一度回せば大乘経一環の功德があるとされ、参詣人はこの輪を盛んにまわした。

ちや屋（茶屋）

清水坂の途中には明治以前には遊郭などもあり、茶屋が建ち並んでいた。

22 紙

花時の清水寺一帯を描く。この当時の清水寺は、寛永6年（1629）の火災で全山が焼失した後、徳川幕府の援助によって再建された景観で、その大部分は今日に残されている。

（上段）

きよみづしゆぎやう（清水執行）

清水寺の寺内組織は執行・目代と六坊と呼ばれた5人の寺僧によって構成されていたが、江戸時代は執行が宝性院、目代が慈心院によって世襲されていた。故にここでいう執行は宝性院のことである。

きよみづおくのせんじゆ（清水奥の千手）

清水寺の本堂は懸崖造りとして著名であるが、本堂奥に西面して建つ奥院もまた千手観音を本尊とする懸崖造りの建物である。

きよみづほんどう（清水本堂）

創建当初の寝殿造りの面影をとどめる本堂は、9間7間の大きさを誇り、前面に左右延びる翼廊の間の板敷きが、清水の舞台として有名である。本尊は十一面千手観音。多くの庶民から信仰され、西国三十三霊場の十六番札所で有ることは、今も変わりがない。

ぢしゆごんげん（地主権現）

清水寺の鎮守社。明治維新以前は、地主権現の名で呼ばれていた。このはたりは古くからの桜の名所。石段上にある2つの石は、「目をふさぎて、掘りすえたる石より石まで歩みよるに、中々すぢかふて行あたらすとぞ」（『出来齋京土産』）という占い石で、中世以来著名であった。現存する。

（下段）

子やすのぢぞう（子安の地蔵） 子安塔

檜皮葺きの小さい三重塔で、現在は本堂の遙か南、錦雲溪を隔てた地に移されるが、江戸時代は西門の外側にあり、安産祈願の信仰で賑わった。本尊は観音であるが、脇士の地蔵尊が安産祈願の対象であったようである。

きよみづろうもん（清水楼門）

清水坂を登りきった所に西に面して建ち、通称を仁王門という。室町時代の建築で、古くは地主神社の門であったという。

しかまづか（鹿間塚）

坂上田村麻呂と僧延珍による清水寺創建にかかわる塚。田村麻呂が射止めた鹿を、延珍の戒めによりこの地に吊ったといわれる。

たきの水（瀧の水）

清水の滝。奥の院の崖下に三筋流れ出る。この水で直接垢離を取る信者が多かったが、持ち帰り薬ともした。多くの水汲みがいたのは、この水を汲んで湯浴みしたからである。

たむらどう（田村堂）

清水寺創建の檀那であった田村麻呂を祀る堂。

あさくらどう（朝倉堂）

本堂の西にあり、越前領国主朝倉貞景によって建立された堂。

きよみづのほんぐわん（清水の本願）

成就院をいう。本願寺とも号し寺の経営を一手に引き受ける勸進所でもあった。その庭からは洛中が見渡せる。

ふくろの水（梟の水）

本堂に入る轟橋の横に手洗水である。水盤の台石に鎌倉時代の宝篋印塔の一部が使用され、その四隅に梟の如き文様があることからこの名で呼ばれる。図では鳥居が描かれるが、本来この位置には轟門（中門）が位置しているはずである。



清水寺参詣曼荼羅（清水寺蔵）